

川端文学研究会

『一草一花』をめぐって

森 晴雄

偶然の機会から掌の小説集『一草一花』を手に入れてから、四、五年も経っただろうか。

表紙はB6判の薄表紙で、最上部に「川端康成小説集」、その下に「一草一花」と題名が、最下部に「青龍社」と社名が、すべて横書きで記されている。装画は全体に花々が描かれ、下の方に厚い大型本が三、四冊横に置かれ、その上に男女の眼が大きく見開かれた顔だけが乗っている西欧風な構成。背は上部に細字で書名と著者名が記されている。表紙裏と見返し部分にも寝ている女性と座っている女性の裸体が一名ずつ描かれている瀟洒な造りであるが、(裏表紙裏も同じ)なぜか装幀者名は明記されていない。

川端康成には「一草一花」と題する文章が四編ある。

1 「文藝春秋」の昭和十九年七月号に発表された、「十七歳」「わかめ」「小切」の掌の小説三篇の総題。

2 昭和二十三年一月に青龍社から刊行された、掌の小説三十篇を収録した作品集。

3 「風景」の昭和四十二年五月号から翌年の十一月号まで連載され、「伊豆の踊子」の作者」の副題を持つエッセイ。

4 「現代日本のエッセイ」の一冊として、「美の存在と発見」「旅たより」「作家の貌」「私の文学」の章立てで構成された、エッセイ・随筆集などの総題。(毎日新聞社、昭和48・10)

以上のうち、今回取り上げたのは2についてである。

「川端康成小説集」と表紙に誌される『一草一花』には、それ以前の四冊の掌の小説集に触れた後、次のような「あとがき」が付けられている。

これらの四冊の内容は重複してゐる作品も多いけれども、私はかなりの数の小説風な小品を制作し、これに愛着を持ち、自分の「標本室」と考へても来たやうである。若い時分の私は詩を書く代りに、このやうな極短い小説を書いたのかもしれない。画家の素描や小品のやうなものでもあらう。

今後私はこの形式を試みるつもりはあるといふものの、前のやうな調子はどう出せないかと思ふ。

右に挙げた四冊はいづれも古く絶版となつてゐるので、作者自身にとつても懐かしい、これらの掌の小説の選集が新に出ることはよろこびであつて、「一草一花」と題した。大半は二十年前の作品であるが、まだ枯れしぼむではないやうに見えるのは、作者ひとりの望郷であらうか。

昭和二十二年十一月二十日

以上の引用文の前には、四冊の作品集が列挙され、収録作品数を「二十六篇」「四十七篇」「二十五篇」「七十七篇」と誌しているが、正確には次の通りである。

『感情裝飾』(金星堂、大正15・6、30篇収録) 『僕の標本室』(新潮社、昭和5・4、47篇) 『短篇集』(砂子屋書房、昭和14・11、

34篇)『川端康成選集 第一巻』(改造社、昭和13・7、77篇)である。

『一草一花』の収録作品は、『川端康成選集』にすべて含まれているので、この著書のみ、(『一草一花』の「あとがき」は、内容の類似から『選集』の「あとがき」を参考にしたと思われる)、あるいは『僕の標本室』も手元において(作品数的一致から)、作品を選択したのであろう。なお、この「一草一花」の「あとがき」は『川端康成全集第三十五巻』(新潮社、昭和58・2)の「追補」の項目に、「青龍社版『一草一花』あとがき」として収録され、収録作品数が正確な数に訂正されているが、「解題」には注は付されていない。

『一草一花』を手にすることによって明らかになったことは、戦前の「私の旧作のうちで、最もなつかしく、最も愛し、今も尚最も多くの人に贈りたいと思ふのは、実にこれらの掌の小説である。」(前記、選集の「あとがき」)という高い評価と、戦後の『川端康成全集「第十一巻」』の「あとがき」(新潮社、昭和25・8)の「私は最も愛してゐるといふことはためらわれ、『若い日の詩精神はかなり生きてゐる』と言ふことにも疑ひを持たぬ。……これらの標本によつて見る私の

歩みはまちがつてゐたやうに思はれる。」という、しばしば引用される相反する述懐は、十六巻本『川端全集』刊行の三年程以前に、代表的な掌の小説三十篇を選択した「一草一花」を編むことによつて、それ以前の「掌の小説」に、一区切りつけてからの感想であつたことが明らかになつたことである。

戦前の改造社版選集や『一草一花』収録作品以外には、川端自身の古い日記をもとにした「骨拾ひ」、若い女性の投稿作品をもとにした「ざくろ」「さと」「紅梅」などしか取り上げることが出来ないとすれば、教えで五十歳を迎え、戦後の十六巻本全集刊行によつて、それまでを振り返り新しい文学世界を指した川端が、「あとがき」で「掌の小説」に否定的な感想を持ったのも自然なことであらう。

松坂俊夫さんの『掌の小説』論(『川端康成「掌の小説」研究』教育出版センター、昭和58・10)には「未見」と、羽鳥徹哉さんの『掌の小説』の総論の詳細な研究文献(川端文学研究会編『論集川端康成一掌の小説』おうふう、平成13・3)にも挙げられていないので、参考までに誌しておくことにした。

……お知らせ……

* 平山三男著、小説集『疲労凍死/天幕の話』(山と溪谷社、二〇〇九・十、一七〇〇円+税)が刊行されました。

* 本会の会員も多く所属する芸術至上主義文芸学会の機関誌『芸術至上主義文芸』35号で、「掌の小説」論の特集が組まれ、十篇の作品論が収録されています。

* 会報の原稿を募集します。

川端康成に関するエッセイ、自著紹介(川端以外も可)、今後の研究目標など、二千字以内(短いものでも結構です)。

川端の作品論や作家論など、四百字詰原稿用紙で、十枚以内。

川端周辺の作家や評論家に関する、エッセイや論など。

** 川端に関する論文やエッセイなどお送り下さい。本誌の「川端康成 参考文献」に掲載させていただきます。

以上、編集(森 晴雄)宛に直接お送り下さい。

事務局 銀の鈴社内

〒二四八-〇〇五 鎌倉市雪の下三一八一-三三

今東光夫妻の法要

高比良直美

九月十九日。上野寛永寺第三靈園で今東光十三回忌と、きよ夫人の一周忌を兼ねた法要が十一時から行われた。四十人余りのこじんまりした法要だったが、寛永寺、中尊寺の高僧の唱和する読経は美しく、有り難い思いがした。

きよ夫人は昨年、今東光と同じ九月十九日に入居していた老人施設で亡くなった。奇しくもというより、やはりという気がした。元編集者のS氏は、以前きよ夫人が、私が死ぬ日はもう決まっているのよとおっしゃっていたことを披露していた。その話をうかがうまでもなく、きよ夫人は、ご自分の亡くなるべき日を決めていた、という気がしていた。そしてその通りに亡くなったのは不思議なようだが、きよ夫人にはそれが自然にできるような、天性が備わっていた気がする。

お元気に志津のご自宅で一人暮らししておられた頃、川端文学の研究者として、近くに住まう者として、時々うかがう機会があった。飲みましよう、おいしいものを食べましよう、というおつきあいだった。きよ夫人は、話の中で「谷

崎先生」「川端先生」とこの二人のみ先生をつけ、他の作家にはさんづけだった。

きよ夫人は、人は生まれながらになすべき役目が決められている気がするというようなことをよくおっしゃっていた。きよ夫人にとつてそれは、亡くなった人を供養するという役目だと感じておられた。今東光は天台宗の僧で、今東光の住まいはお寺さんだったのだから、夫人の役目としてそれは当然だとも言える。しかし、それだけではなく、そうせずにはいられないような天命を自覚なさっていたのだと思う。

夫人からうかがった話を正確には記憶していないが、今家のぼらぼらに存在していた墓をまとめたり、その人の思いをくんで整備をなさったりしたようだ。だれかに命じられて行つたのではない。また、お施餓鬼帖を見せていたこと、谷崎潤一郎に加え、東光が旧制中学を追われる原因となった女学生や、ご縁のあった編集者、そして川端康成の名前もそのなかにあった。きよ夫人は、これは主に自殺や病氣などで亡くなったかたなのだとおっしゃっていた。十人以上のお名前が並んでいた。そして毎月、供養なさっていた。

お墓についてはこだわりを持っておられ、墓の底は土のままであること。骨壺は素焼きが一番良いとおっしゃっていた。水が溜まることな

くお骨が土に帰って行けるのが、一番気持ちが良いのだと。また、私が亡くなったらだれが供養してくれるだろうかと気にかけておられた。ご自身のこともあるだろうが、これまで供養して来た人たちのことを気にかけてのことだろう。

今東光と命日と同じにする亡くなり方は、夫婦愛とも考えられるが、後の供養を考えた始末の良さとも思われる。

法要の喪主はきよ夫人の甥御さんで、ご夫婦で晩年のきよさんを支えておられた。皆さんに二度集まっていたたくのは大変だろうと、同じ日に亡くなったのでしようと冗談としておっしゃっていたが、ほんとうにそうかもしれないと思った。また、今回初めて知ったことだが、この世に生まれ出ることなく亡くなった男子の命日も月は違うが十九日であったという。十九日は、きよ夫人にとつて二重に特別な日だったのだ。

寛永寺の今家のお墓は五輪の塔だ。読経を済ませた祭壇から運ばれた色とりどりの花が取り巻いて置かれ、秋晴れのもと、華やかさのあるお墓の風景は今東光夫妻にふさわしいものだった。

川端康成の黒紋付

白鳥 博康

日本人の多くが、川端康成の姿をイメージした時、真先に思い浮かべるのは、ノーベル賞授賞式の、黒紋付姿ではないだろうか。

授賞式の写真は、例えば、中・高等学校の国語便覧に必ずといっていいほど掲載されているので（ヒマを持て余した授業中に）、誰もが一度は目にしたことがあると思う。数ある川端の写真の中でも、とりわけ有名な一葉といえるだろう。

この写真が、他の川端の写真と決定的に異なっていたインパクトを持っているとすれば、それは、単純だが力強い文化に裏打された、洋服と和服の鮮やかなコントラストに集約される。ホワイトタイにテイルコートの男達と、イヴニングドレスの女達がひしめく会場にあって、川端の黒紋付姿は際立っている。

丸に三つ鱗の紋がついた黒羽二重の長着と羽織。聞くところによると、このとき着用した袴は、人間国宝の故甲田栄佑が織り上げた精好（せいこう）仙台平だそうだ（余談だが現在本物の仙台平を織っているのは、同じく人間国宝と

なった息子の甲田綏朗氏ただ一人である）。このようなところからも、美の本質を求め続けた、川端らしさが垣間見える気がする。

ところで、現代の私達が黒紋付を着用するとなれば（和服など着ない、という意味は一まずおいて）、結婚式や成人式といった、晴れがましいシーンばかりを想像してしまうだろう。しかし、男性和装の第一礼装である黒紋付は、正式な喪服としても用いられる。だからというわけではないけれど、私は、ノーベル賞授賞式の写真を見るたびに、川端の「葬式の名人」を思い出してしまふ。

いうまでもなく「葬式の名人」は、川端の「私小説」『独影自命』的作品である。作中で、川端自身と思しき主人公は「亡父の絹の羽織袴などを着けて白足袋を履き数珠を持つ」って、親戚の葬儀に出席し続ける。直接的に黒紋付とは書かれていないが「礼装」というからには、家紋が入っていないはずがない。

結局「父の遺した礼装は従兄の婚礼に一度慶びの日に私を飾っただけで数へ切れない程の葬式の日に私を墓場に運んだ。遂に私を葬式の名人たらしめ」るまでになる。

この当時の川端にとって、黒紋付は人の死とそれにまつわる悲しみの象徴だったろう。同時に、葬式という社会的儀式において、大人としての振る舞いを覚えさせてくれたのも、この

「父の遺した礼装」だったとも考えられる。

時代は下るが、終戦を迎え、玉音放送を聞いた時の川端の装いも、黒紋付だったようだ。このときの様子は『高見順日記』や『川端康成とともに』（川端秀子）に詳しく書かれているので、少し引用したい。

八月十五日、天皇陛下の御放送があると
いうことで、私たちは娘も含めて（娘には
学校の制服を着せました）正装してラジオ
を聞きました。（中略）こういうことはき
ちんと居ずまいを正して聞くというのが、
主人の姿勢だったのです。『川端康成と
もに』

端的ながら、川端の衣服に対する感覚を窺うことができる一節だ。

多感な青年期と、日本のターニングポイントとなった終戦。川端は、黒紋付を着ていた。ノーベル賞授賞式の黒紋付は、どことなく、これらの悲しみの延長線上にあるような気がする。もちろん、川端がどのような思いで、黒紋付に身を包みノーベル賞授賞式に臨んだのか、本当のところは川端自身にしかわからない。わからないけれど、写真の川端からは、数々の悲しみを乗り越えた、静かな逞しさを感じることができる。

川端康成参考文献

平成20年11月～21年11月

森 晴雄編

1 特集

川端康成 蒐められた日本の美 「別冊 太陽 日本のこころ157」21年2月23日
羽鳥徹哉 作家が愛した美、作家に愛された美—絶望を希望に転じ、生命の輝きを見出す
羽鳥徹哉 川端文学の世界 美についての十章
平山三男・水原園博 川端康成 コレクションのすべて
片山倫太郎・田村嘉勝 文豪をめぐる八人の作家たち
田村充正・福田淳子 川端文学、美の反響
<評伝>孤独と向き合って 真田邦子
川端香男里 川端康成と美の世界
森晴雄 略年譜

野上彰展～川端康成との風景～ 徳島県立文学書道館 8月22日

牛山剛 詩人・野上彰
川端香男里 稀有な出会い—川端康成と野上彰
羽鳥徹哉 川端康成の文学
野上彰の足跡 特集 直筆書簡を読む
<場所>でたどる川端文学の世界
野上彰年譜・川端康成略年譜 野上彰著作目録 野末明 編
主要展示資料一覧 野上彰の作詞・訳詩作品

川端康成『掌の小説』の現在 「芸術至上主義文芸」35 平成21・11

森 晴雄 「木の上」—恋人たちの秘密
渡部麻実 「秋の雨」—記憶更新の京旅行
井上二葉 「月下美人」と音楽
田村嘉勝 「小切」のリアリティ—「文芸春秋」(昭19・7)の軌跡
堀内京 「ざくろ」論—混沌する生と死
野末明 「本門寺御会式」論
深沢晴美 「秋の雷」考—『孝義録』『二十四考』等との関連をふまえて
高比良直美 「有難う」—野山に満たされる感謝
竹内直人 「合掌」考—人格化する<合掌>
山田吉郎 「冬近し」試論—囲碁の風景を起点として

2 雑誌 論文・評論

切通理作 文学の中性名刺—川端康成と坂口安吾 「文学界」平成20年11月
金森範子 『美しい旅』と秋山ちえ子 — 「小品」第二十八集 11月
川端文学と岐阜—西方寺彷徨— 「長良清流」第41号 10月
森本穂 魔界の住人 川端康成—その生涯と文学— 第三回～十四回
「文芸日女道」486～498 平成20年12月～21年11月
森晴雄 川端康成「火に行く彼女」—私の感情 「雲」平成20年12月、21年1月
「門松を焚く」—泥棒・別れ話など 2月～5月
「鶴と踊子」—「夜鳴き」と「変な男」 6月～8月
「鉄の梯子」—「新しい恋」 9月～12月
川端康成「舞踊靴」論—谷崎潤一郎「富美子の足」に触れつつ 「解釈」7・8月
鄭香在 作家と映画 川端康成 川端文学における映画 「国文学」12月
中村美子 『雪国』における「悲しいわ」の解釈をめぐって 「解釈」21月1・2月
羽鳥徹哉 仏教と川端康成 「解釈と鑑賞」2月
高井若菜 川端康成『掌の小説』における「朝の爪」の英訳比較研究 * (英文)
「同志社女子大学大学院 文学研究科紀要」9 3月
高橋真理 川端康成「南伊豆行」—「伊豆の踊子」を照り返すもの
大東文化大学人文科学研究所 3月
中嶋展子 川端康成の少女小説—「少女倶楽部」掲載作品の素材を中心に
「岡大國文論稿」37 3月
川端康成「二十歳」論—「幼心」と「女性的なもの」 「解釈」7・8月
川端康成『眠れる美女論』—祈りとなくさめ 「芸術至上主義文芸」35 11月
三浦卓 『少女の友』のコミュニティーと川端康成「美しい旅」—<障害者>から<満州
>へ— 「日本近代文学」第80集 5月

- 沼田真里 『十六歳の日記』論－川端文学と盲目 「法政大学大学院紀要」62号 平成20
 小林洋介 <人格>の異常と表現行為をめぐる物語－川端康成「或る詩風と画風」論
 「国語と国文学」6月
 石川則夫 <文脈>の匿名性と意味の変容－川端康成「金糸雀」を事例にして
 「日本文学」8月
 澤田繁晴 川端康成という仕組－「父母尻の手紙」「油」「天授の子」
 「星の広場」3号 室生屋星学会 11月

3 単行本所収 論文・エッセイ・解説

- 近藤富枝 川端康成「あはれな日本の美しさ」
 『文士のきもの』河出書房 平成20年11月30日
 丹尾安典 いはねばこそあれ－男色の景色 第六章「礼儀」 新潮社 平成20年12月20日
 *注 「伊豆の踊子」について
 笠森勇 5 軽井沢での交流 川端康成 『屋敷と周辺の文学者』北国新聞社 12月25日
 森本穂 第2部 同時代のなかの「関西文化圏」 5 豊饒な土壌－川端康成「葬式の名
 人」「美しさと哀しみと」
 黒田大河・他編『横光利一と関西文化圏』松籟社 12月30日
 高原英理 13 川端康成「みづうみ」
 千石英世・千葉一幹 編著 『名作は隠れている』ミネルヴァ書房 平成21年1月30日
 爆笑問題 川端康成 『日本文学変態論 日本史原論』幻冬社 3月20日
 伊吹和子 川端康成 『めぐり逢った作家たち』平凡社 4月10日
 小山慶太 3章 老犬の涙 川端康成の黒牡丹の死
 『犬と人のいる文学誌』中公新書 4月25日
 沼正三 川端康成『眠れる美女』 『異嗜食的作家論』現代書館・5月31日
 「裏窓」昭和39・5
 三橋修 第二章 二つの大戦後 二 においを見つめた川端康成
 第三章 一九六〇代という転換点 一 においのデカダンス 川端康成再考
 『作家は何を嗅いできたか においあるいは感性の歴史』現代書館 6月1日
 細谷博 「篝火」の中の川端康成－「門がなかった」の<孤立>
 日本近代文学会東海支部編『<東海>を読む近代空間(トポス)と文学』
 (風媒社 6月30日)
 坂本忠雄 川端康成『雪国』－インヒューマンな近代の体现者 古井由吉・福田和也
 『文学の器－現代作家と語る昭和文学の光芒－』扶桑社 8月10日
 石原千秋 第四章 駒子が愛したのは東京の男－川端康成『雪国』
 『名作の書き出し 漱石から春樹まで』光文社新書 9月20日

4 その他

- 川端康成 宮沢康造・本城靖監修『日本の文学碑 1 近現代の作家たち』
 日外アソシエーツ 平成20年11月25日
 川畑和成 「狂った一頁」追加資料 「横光利一文学会会報」14号 12月6日
 野寄勉 「新青年」の川端康成－1930年の踊子
 「芸術至上主義学会会報」第13号 5月

**

- 少女の文学1 眠れる美女 川端康成 プチグラパブリッシング 平成20年月20日
 『少女の友』創刊100周年記念号 明治・大正・昭和ベストセクション
 実業乃日本社 平成21年3月21日 遠藤寛子・内田静枝
 「乙女の港」1 花選び

補遺

- 張月環 『川端康成 追い求める愛と美』 致良出版社(台湾) 平成20年8月20日
 序章 第一章 掌の小説 第二章 追いかける行動
 第三章 美しく哀しいところ 第四章 感謝と謝罪 終章
 吉田悦志 『きみに語る－近代日本の作家と作品』 第一部 作家と作品を語る 第九講
 裏切られた愛の探訪者 川端康成 DTP出版 4月1日
 西村英津子 『雪国』の問題－その美的世界を、めぐって－ 「清心語文」第十号
 ノートルダム清心女子大学 7月
 山下敦史 『古都』川端康成著 『ネタになる 名作文学33』プレジデント社
 9月10日

